宮城県のニホンザル

第　1　号

アンケートによるサルの分布と民俗

復　刻　版

昭和６２年３月

宮城のサル調査会

アンケートによる
サルの分布と民俗

宮城教育大学　伊沢　紘生
石巻市万石浦小学校　遠藤　純二

Ⅰ．はじめに

私たちは、昭和57年以来、牡鹿町金華山、宮城町奥新川、秋保町二口を中心に、県下のできるだけ広域をカバーしながら、ニホンザルの調査や情報の収集をおこなってきた。おもな動機は、今日多くの県で、ニホンザルの生息の実態が詳細に把握されはじめているのにひきかえ、本県ではまとまった調査がほとんどなされていない、その現状を少しでもカバーできれば、ということだった。

しかし、それらのフィールド調査を通して私たちが実感としてもったのは、県内の奥山で、森林の伐採や針葉樹（スギやヒノキなど）の植林が大規模に進み、また道路や各種施設の建設など開発も進んで、サルの生息環境が破壊されたり著しくせばめられているのではないか、という点だった。もしそうなら、他県、とくに中部地方以西のいくつもの県で今日大きな社会問題になっている猿害が、本県でもいずれ深刻な問題になることが当然予測されるわけで、そのためには、サルの生息状況の調査を急がねばならない、と思うようになった。

また私たちは、聞き込み調査によって、県下のいくつかの地域で、サルがかつて生息していたが絶滅したとか、かつてはいなかったのに最近姿を見かけるようになった、という情報に接した。サルにかぎらず、野生動物に関する情報は、時間がたてばたつほど不確かになり、変質し、消滅してしまうものだ。そうなれば、過去を復元する作業は困難になり、したがって、現状を正しく理解することも不可能になるだろう。私たちはそれらの情報を早急に収集しておく必要性も痛感した。

ところで、県下のニホンザルの分布の過去を知るには、いずれも全国を対象にしたものだが、長谷部（1923）、岸田（1953）、竹下（1964）、環境庁（1978）の調査や報告がある。もし、それらの結果と比較しうる資料を私たちが入手できれば、上述したことがらにたいし、いくらか貢

献できるのではないかと考えた。そこで、宮城県の全市町村の教育委員会に、ニホンザルの生息状況に関するアンケート用紙を送付し、協力を依頼することにした。アンケート調査にあたっては、ニホンザルの民俗的なことがらについてもあわせおこなった。

県下のニホンザルの分布の詳細については、私たちのこれまでの調査結果もあわせ別途に検討をおこなうが、ここではとりあえず、アンケート調査の結果を中心に、市町村単位で、過去の報告と比較しながらまとめることにしたい。

なお、アンケートは1986年1月27日に発送し、回答が返送されてきた最後が同年5月27日なので、この集計結果には、それ以後に各教育委員会が入手しているデータや情報はふくまれていない。アンケートの回収率は100%である。

Ⅱ．サルの生息状況について

アンケートでは、野生ニホンザルが今も生息しているか、以前は生息し現在は生息していないか、昔から生息していないか、の3点について、また、生息していれば、群れかハナレザルか、群れの場合はどこに何群いて個体数はどのくらいか、以前に生息していれば、いつ頃までどのくらいいて、いなくなった原因はなにか、などを中心に尋ねた。

アンケートの結果から、1）現在群れが生息している、2）かって生息していた、3）ハナレザルが生息している、の3項目について、報告のあった市町村を以下に示す。

1．群れが生息している地域

群れが生息している市町村と、生息地域、群れの数や頭数、目撃場所やその年月は、以下の通りである。

・牡鹿町

金華山に生息しているが、半島部には生息していない。

・宮崎町

8～12頭の群れと2～3頭の群れ(？)の1～2群が生息している。目撃日時、場所は、s.55.10　宝森山、大倉山、ビングシ山、である。

・小野田町

船形山系に約20頭が生息している。

・宮城町

関山トンネル付近、奥新川駅付近、新川地区、熊沢林道付近、大倉ダム～定義付近、作並付近でそれぞれ群れが目撃されている。群れの数は約４群、頭数は奥新川駅付近の群れが約80頭。

・秋保町

ｓ60.8　穴戸沢高倉山林道終点付近　／ｓ60.10　三方倉山～姉滝の遊歩道　／　ｓ60.10　奥新川南沢（約80頭）　で群れの生息が確認されている。３群100頭

・七ヶ宿町

湯ノ原一帯に約２群40頭が生息している。

・川崎町

群れかハナレザルか不明だが、昭和60年10月に峨々温泉付近と笹谷仙人沢の奥でサルを見たという情報あり。

・泉市

泉ケ岳一帯に生息しているかもしれないが、詳細は不明。

２．かつて生息していた地域

かってサルが生息していた市町村と、生息していた年代①、生息場所や群れの数、頭数②、いなくなった理由③は、以下の通りである。なお、アンケートでは最初にサルが生息しているか否かを問うたため、ハナレザルが生息する市町村のうちいくつかは、そこでイエスと答えたことによって、ハナレザルの詳しい報告だけで、今は生息していないがかっては生息していたという問いに記載しなかった可能性が残されている。

・鳴子町

①不明　②鬼首付近　③開発によって

・中新田町

①昭和18年頃　②不明、２群　③開発によって

・蔵王町

①昭和30年頃　②蔵王山麓、約２群　③開発によって

・迫町

① 100年ほど前　②新田字大形菱の倉付近　③開発および森林の伐採によって

・田尻町

①明治時代　②加護坊山付近　③森林の伐採によって

・志津川町

①不明　②不明　③狩猟によって

・河北町

① 100年ほど前　②不明　③不明

・雄勝町

①明治以前　②　上山～雄勝峠　③森林の伐採によって

・女川町

①明治初期頃　②不明、群れかどうか不明　③野犬、その他で金華山方面に逃げた。

・涌谷町

①明治20年頃まで　②不明、２～３群　③開発、森林の伐採によって

・岩沼市

①昭和15年　②志賀、約１群　③開発、森林の伐採によって

・気仙沼市

①不明　②不明　③森林の伐採によって

・泉市

①不明　②不明　③森林の伐採によって

３．ハナレザルが生息している地域

ハナレザルが生息している地域と、目撃された年月および目撃場所は以下の通りである。

・栗駒町

s 60.5.10　馬場～駒ノ湯線　／s 60.5.9　万宝～冷線中間

・花山村

s 60.11　大池沢

・宮崎町

s 55.10　宝森

・色麻町

s 58.11 小栗山字岳山

・宮城町

s 60.10　大倉字迭込斎ノ神

・白石市

s 60.12　福岡八宮字不忘山　／s 59.10　小原字江志山　／s 51.5福岡成本字上田切

・丸森町

s 44.11　大内字沼端上　／s 61.1　金山字石倉　／s 61.2　字大畑

・田尻町

s 58.8　加護坊山北方

・北上町

s 56～s 58　白浜～小室

・河北町

s 56.9　上品山　／s 57.4　針岡字中道　／s 59.6　針岡字追館

・女川町

s 55　女川町内

・牡鹿町

s 60.2　谷川浜

・石巻市

s 60.7　南境字中斎　／s 59.12　南境字鶴巻

・大和町

s 59.2　水面石神神社　／s 59.10　斤沢部落　／s 60.9下原種沢～桑沼

・秋保町

s 59.秋　南川ダム鎌倉山　／s 60.10　本小屋の田の上s 60.10　野尻町頭共同墓地　／s 60.11　三方倉野尻簡易水道池

・涌谷町

未確認情報として数年前、篦岳山

4．群れの生息状況についての考察

ニホンザル生息状況に関する上述したアンケート結果のうち、群れの生息や絶滅について、市町村マップで示したのが図1である。すなわち、

県下74市町村のうち、群れが確実に生息しているのは7市町村で、生息しているかもしれない1市町村を加えたとしても、わずか8市町村にすぎない。なお、図1では、牡鹿町を半島部と金華山に区別して示したが、それは、過去の記録と比較するさいの便宜を考えてのことである（以下の図2～図5についても同様）。

図1からわかるように、現在群れが分布する地域は、山形県との県境を画する奥羽山脈一帯を含む市町村、および金華山にかぎられる。つぎに、このような分布はなにを意味するか、過去の記録と比較検討する。

長谷部言人（当時帝国大学医学部教授）は、1923年に各府県の郡長、島司宛にニホンザル生息状況の照会状を出した。照会状にはアンケート用紙が添えられ、回答された資料が東京大学理学部人類学教室に保管されている。それらをもとに、天笠敏文と伊藤仁子はグリット法を使い、当時における全国のニホンザルの分布状況をまとめた。天笠・伊藤（1978）がまとめた分布図から、本県について、1923年（大正12年）当時の分布状況を現在の市町村単位に読み直したのが図2である。

1950年に農林省狩猟調査室は、営林局や都道府県の狩猟係官に照会して、ニホンザルに関する諸般の報告を求め、それを岸田久吉がまとめた。岸田(1953）による全国のニホンザルの分布図から、本県について、1950年（昭和25年）当時の分布状況を現在の市町村単位に読み直したのが図3である。

竹下完（当時日本モンキーセンター研究員）は、1961年から1962年にかけて、都道府庁林務課を通じ、ニホンザルの生息する市町村の照会をおこなった。このアンケート調査の回収率は東北地方については65.1%とかなり低く、上記2つの資料に比べるとずっと精度が落ちるが、それをまとめた竹下（1963）の分布図から、本県について読み直したのが図4である。

環境庁は第2回緑の国勢調査を1978年と1979年におこなった。本県については小野泰正（岩手大学教授）を調査代表として、聞きとりにより生息や絶滅の情報を収集し、結果を分布メッシュ図に表示した。公表されている環境庁（1981）の分布メッシュ図を、市町村単位に読み直したのが図5である。

以上の5つの図を比較して、問題なのは、ごく最近の調査結果である図5が、もっとも年代の古い図2に酷似している点だ。だが、図1に示

した今回のアンケート結果や、私たちの現地調査からは、ニホンザルが6～7年前に図5のような広域に生息していたとはとうてい考えられず、おそらく調査方法に大きな難点があったと思われる。

そこで、この図5と、精度に問題がある図4をのぞいて、図2、図3、図1の3つを比較すると（図2と図3の間には27年の、図3と図1の間には36年の間隔がある)、つぎの2点が指摘できる。すなわち、①ニホンザルの生息する市町村が、時代とともに減少していること、②市町村単位で絶滅していった年代を追うと、まず北上高地の内陸部一帯が（おそらく明治から大正初めにかけて）、ついで三陸海岸域と白石・丸森以南の県境域が（おそらく大正末から昭和初めにかけて）、さらに奥羽山脈の県北部が（昭和30年以降）、そして現在は奥羽山脈の県中部・南部にしか生息せず、しかもその生息市町村は分断されつつあること、の2点である。また、絶滅したおもな要因は、アンケート調査結果からは、古くは狩猟、近年では森林の伐採と開発であると考えられる。

5．ハナレザルについての考察

ハナレザルについて、生息の報告があった市町村を、市町村マップで示したのが図6である。この図から、ハナレザルは広く県内に出没しているが、県北部の市町村に多い傾向が認められる。

また、この図と図1とを比較すれば、ハナレザルの出没する市町村として、①現在も群れが生息している奥羽山脈沿いの市町村と隣接する市町村、②群れが絶滅した牡鹿半島およびその周辺の市町村、③群れが絶滅した北上高地の市町村、という3つのかたまりがあることがわかる。すなわち、現在ハナレザルが出没している地域と、かつて群れが生息し現在では絶滅してしまった地域とは、大幅に重複しているわけである。

そのうち、①については、群れが生息しているかその隣接の市町村なので、ハナレザルの行動範囲からして当然といえるだろう。ところが②については、その一円では金華山にしか群れが生息せず、かれらが頻繁に海を泳いで半島部に渡るとは考えがたいので、いったいどこからやって来るのか不明である。同じことが③についてもいえる。それらの解明は、今後の地道な調査に待つしかない。

ところで、ハナレザルの出没する地域が、群れの絶滅した地域と大幅

に重複するという事実は、すでに述べたように、群れの絶滅が森林の伐採や開発による生息環境の破壊だとすれば、それらによって、現在はハナレザルしか利用できない地域であることを物語っている、ともいえるだろう。

Ⅲ．猿害について

猿害については、本県においてはまだ、サルの生息域が、人の生活圏と重複が比較的少ない奥山にあることから、他県ほど大きな問題にはなっていない。しかし、今回の調査で、いくつかの地域で猿害が出ているという回答があった。それぞれの地域と被害作物は以下の通りである。

・七ヶ宿町・・・水稲、大豆
・宮城町　・・・水稲、大豆
・秋保町　・・・クワ
・河北町　・・・シイタケ、タマネギ
・石巻市　・・・ジャガイモ、長イモ

これらの地域のうち、河北町と石巻市の被害は、ハナレザルによるものである。したがって、群れによる被害は、現在七ヶ宿町、宮城町、秋保町の３市町村であるが、今後さらに森林の伐採や開発が進み、人の生活圏とサルの生息域との重複が増していくにつれ、猿害も拡大していくことが憂慮される。

Ⅳ．ニホンザルの民俗的なことがらについて

私たち日本人とニホンザルは、昔話、猿まわし、ことわざ、庚申講をはじめとする民間信仰などを通して、古くから緊密に関わってきた。そして、奥羽山脈と北上高地の深い山々や三陸の入り組んだ海岸域をもち、かつてマタギなどによる狩猟もおこなわれていた本県でも、各地で、人とサルとがさまざまに関わりあっていただろうことは疑いない。

このような民俗伝承を明らかにできれば、県下のそれぞれの地域の人にとって、サルはどのような動物であったか（自然観）を知ることができるし、遠い過去のニホンザルの生息状況を復元するひとつの手掛かりも得られるはずだし、さらに、県下の地域文化のちがいを歴史的に考察

する一助にもなると考えられる。

ニホンザルの生息状況に関するアンケート調査とあわせ、民俗的なことがらの調査をおこなったのは、以上のような主旨による。アンケートの項目は、サルの呼び名、狩猟について、サルのつく地名、ことわざや昔話などである。

以下に、アンケートから得られた民俗的なことがらについて、項目ごとにまとめをおこなう。

1．ニホンザルの呼び名について

ニホンザルの呼び名で最も一般的に使われているのは「サル」である。アンケートの結果でも、40の市町村がこの呼び名を使っているという回答だった。この他に方言としての呼び名がいくつかあったので、以下にまとめる。

なお、「サル」「サルコ」「ヤエン」「ヤエンコ」は、標準日本語の猿、野猿からきていることは明らかで、語尾の「コ」は小さいとか可愛らしいを意味する接尾語である。「エテコウ」は漢語の猿猴（「エンコウ」）の訛ったもの、「マシラ」は　語の摩斯叱（「マシダ」）からきていると考えられていて、その省略形として「マシ」や、それの訛った「マス」がある。「ヤマノオンツァン」「オンツァアン」「ヤマノオズ」は愛称で、地方によっては「ヤマノオヤジ」とも呼ばれる。

「サルコ」・・・・・・・栗駒町、瀬峰町、志波姫町、石越町
「ヤエン」・・・・・・・宮城町、気仙沼市、秋保町
「ヤエンコ」・・・・・・秋保町
「エテコウ」・・・・・・丸森町
「マシラ」・・・・・・・田尻町
「ヤマノオンツァン」　花山町、宮崎町、中新田町、宮城町、川崎町、七ヶ宿町、丸森町、柴田町、迫町、南方町、田尻町、涌谷町、女川町、登米町、気仙沼市、秋保町
「オンツァアン」・・・瀬峰町、女川町
「ヤマノオズ(オジ)」　宮崎町

以上のことから、県内では、「サル」以外には「ヤマノオンツァン」

などの愛称での呼び名が最も多く使われていることがわかる。また、珍しいものとしては「マシラ」「ヤエンコ」などがある。しかし、今回の調査では、呼び名について、地方差と呼びうるような、分布の顕著なかたよりはみられなかった。

2．狩猟について

ニホンザルが過去に狩猟の対象となっていたのは8市町村である。その時期、利用法、狩猟道具、狩猟方法を表1にまとめた。

この表をみると、ニホンザルが狩猟の対象となっていた地域は県下では比較的少なく、狩猟がサルを撃つことを嫌っていたことがわかる。それは、サルの呼び名に愛称を使うことが多いという先の結果と一脈通ずるところがあるように思われる。

また、狩猟道具、狩猟方法、利用方法については、いずれの地域も大差がない。サルはおもに食用、薬用に利用されていた。道具については、ほとんどが村田銃などの鉄砲によるものであるが、2つの地域でわなを利用している。ただ、わながどのようなものであり、どんな方法でサルを獲ったのかについては明らかでない。

3．伝説、昔話、ことわざ、庚申信仰について

ニホンザルに関係した伝説、昔話、ことわざ、庚申信仰（庚申塔を含む）が残っている地域を図7にまとめた。ここでは、それらの詳しい分類は避け、伝承として一括してまとめた。

この図からわかるように、県下にはニホンザルが生息している地域だけでなく、生息していない地域にも、多くの伝承が残されている。そして、これらの伝承の多くは県の北部に集中しているという傾向を示している。

4．サルに関係する地名

サルの名のつく地名がある市町村は16で、地名数は24であった。市町村ごとに、それらの地名を一覧表にしたのが表2である。

これら16市町村と、ニホンザルの群れが生息しているかかつて生息していた市町村（図１参照）との重複度は、37.5パーセントにしかならず、あまり高くない。したがって、アンケートの結果からは、サルに関係する地名はサルの生息とそれほど対応していないといえる。

以上が、ニホンザルの民俗的なことがらに関するアンケート調査のまとめである。今回の結果だけでは資料が十分とはいえず、最初に記したニホンザルの過去の復元や地域文化の違いなどについて、突っ込んだ考察は困難であったが、今後、このような資料をできるだけ多く集めたのちに、改めて分析を試みたい。

謝辞

本調査をおこなうにあたり、御多忙のなか、アンケートに回答していただいたすべての市町村の教育委員会の方々、教育委員会から依頼を受けて回答して下さった多くの方々、過去の分布に関して御教示いただいた東京都青梅市新町中学校教諭・天笠敏文氏に心から感謝いたします。また、アンケート調査の最初から報告書の作成にいたる全過程に、さまざまな協力ををいただいた宮城教育大学第29合同研究室の学生諸氏に、お礼を申し上げます。

・引用文献

天笠敏文・伊藤仁子（1978）
大正時代のニホンザルの分布ー長谷部アンケート調査によるー
「にほんざる」No.4 p.96-106

飯田道夫（1973）
「猿よもやま話」　評論社

環境庁（1981）
「動植物分布図・宮城県」　環境庁

岸田久吉（1953）
代表的林棲哺乳動物ニホンザル調査報告
「鳥獣調査報告」 No.14

竹下　完（1964）

野生ニホンザルの分布及びポピュレーション（下）

ーアンケート調査によるー

「野猿」 No.20.21

宮城県市町村区画図

表1　狩猟について

	時期	利用法	道具	狩猟方法
中新田町	s 20	黒焼き、毛皮	村田銃、散弾銃	単独
大和町	不明	不明	わな	不明
蔵王町	江戸時代	食用	不明	巻き狩り
七ヶ宿町	s 10	食用、薬用	村田銃	単独
田尻町	明治時代	食用	村田銃	不明
女川町	明治～昭和初期	毛皮、食用 薬用	村田銃 わな	巻き狩り 待ち伏せ
宮城町	s 20	頭の黒焼き （サンコウヤキ） 食用、毛皮 ひゃくひろ	村田銃 ライフル	単独 巻き狩り
秋保町	s 10	頭の黒焼き 毛皮、食用	村田銃	単独 巻き狩り

表2　サルに関する地名一覧

	地名		地名
栗駒町	猿田、猿飛来	名取市	猿こう、新猿こう
宮崎町	猿倉、オジの沢	河南町	猿田
一迫町	猿田原	秋保町	猿倉
蔵王町	猿（ネコ）田	田尻町	呼猿嶺
七ヶ宿町	猿渡り	高清水町	猿楽田
涌谷町	猿手山、猿手	本吉町	猿内
白石市	猿萱、猿（ネコ）鼻、 猿鼻下川原	気仙沼市	猿掛、猿岩、 猿返し
角田市	猿田	丸森町	猿ばね岩

図1．アンケートによるサルの分布

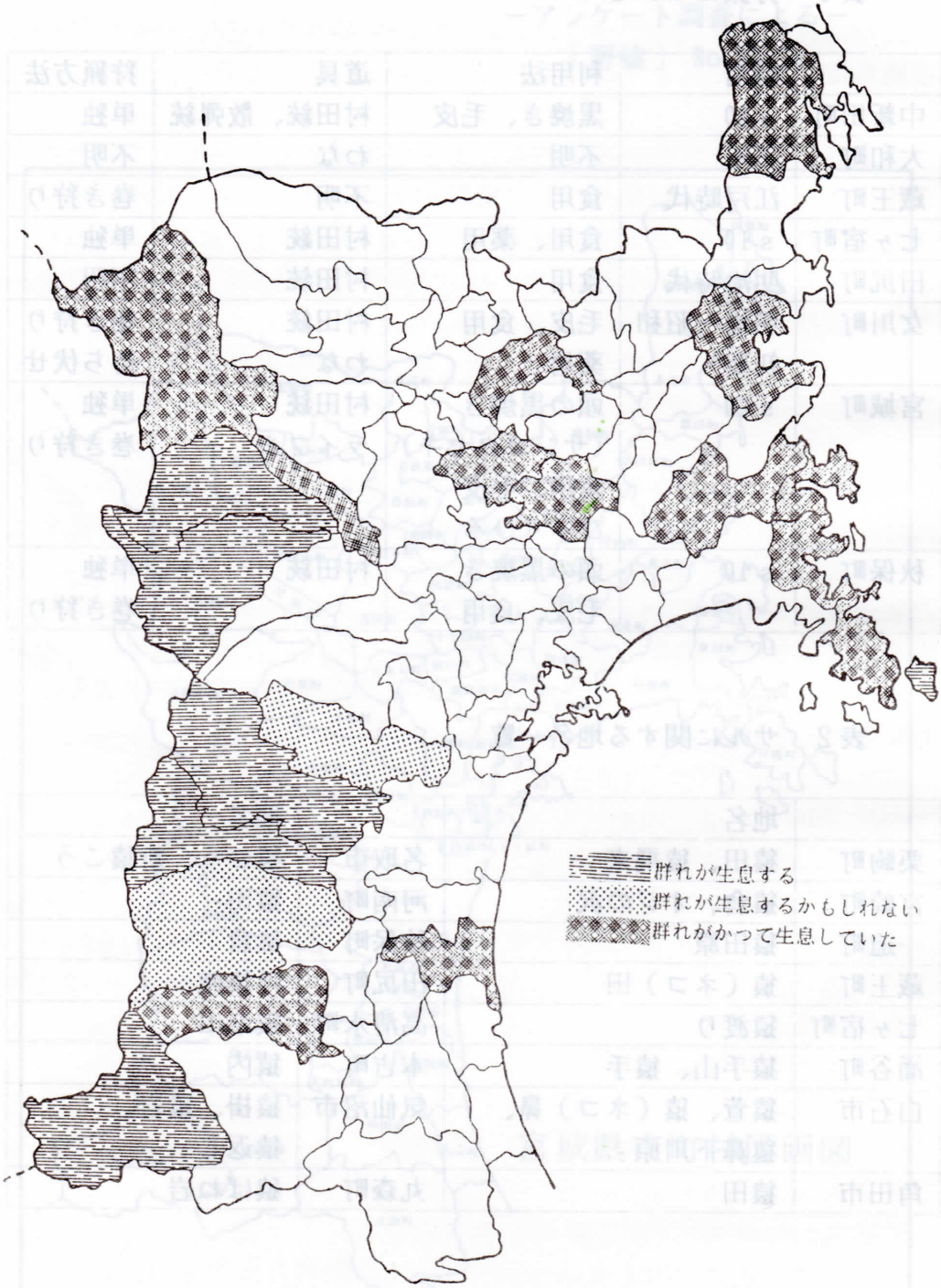

図2．長谷部（1923）によるサルの分布

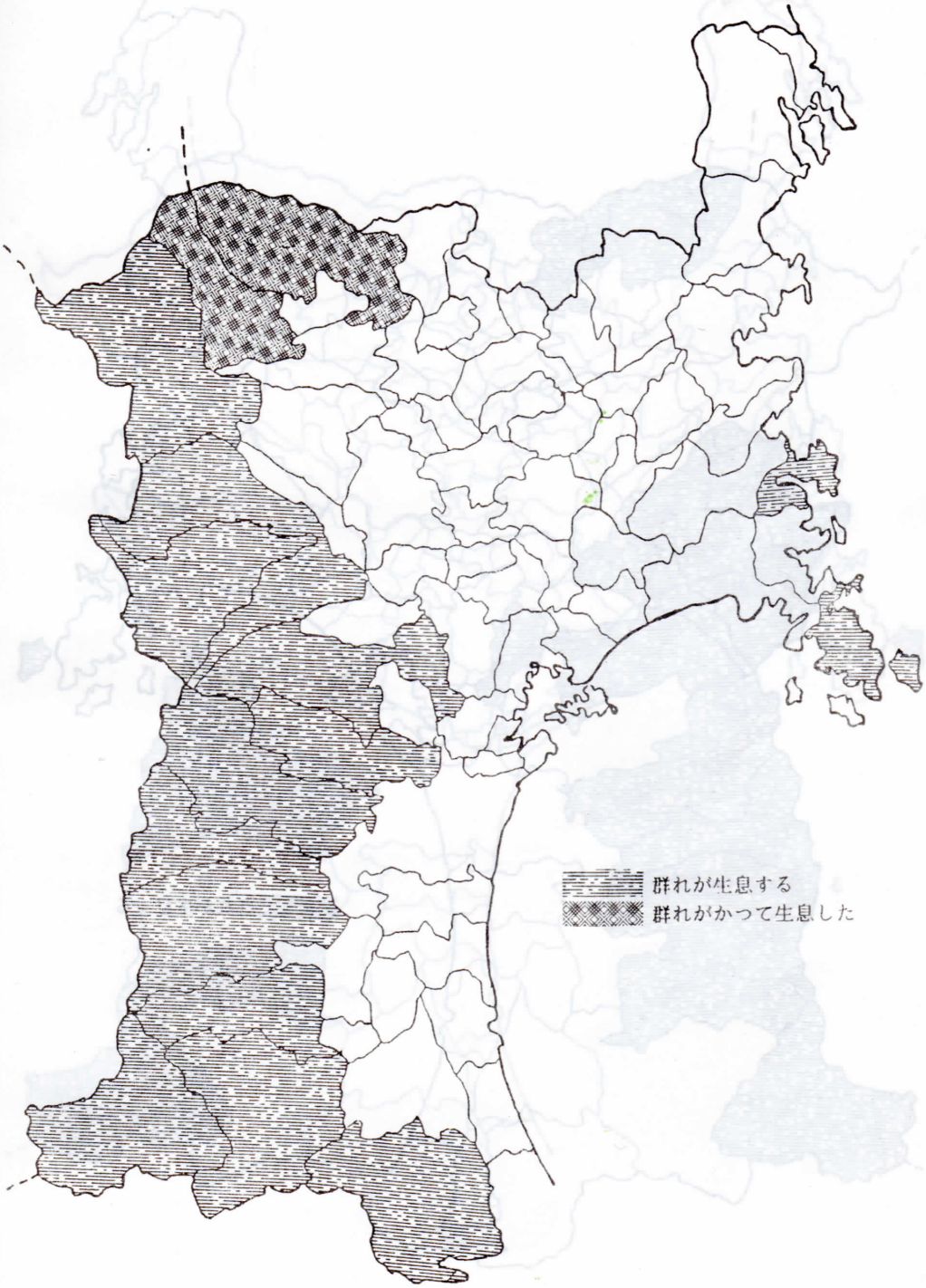

図3．岸田（1953）によるサルの分布

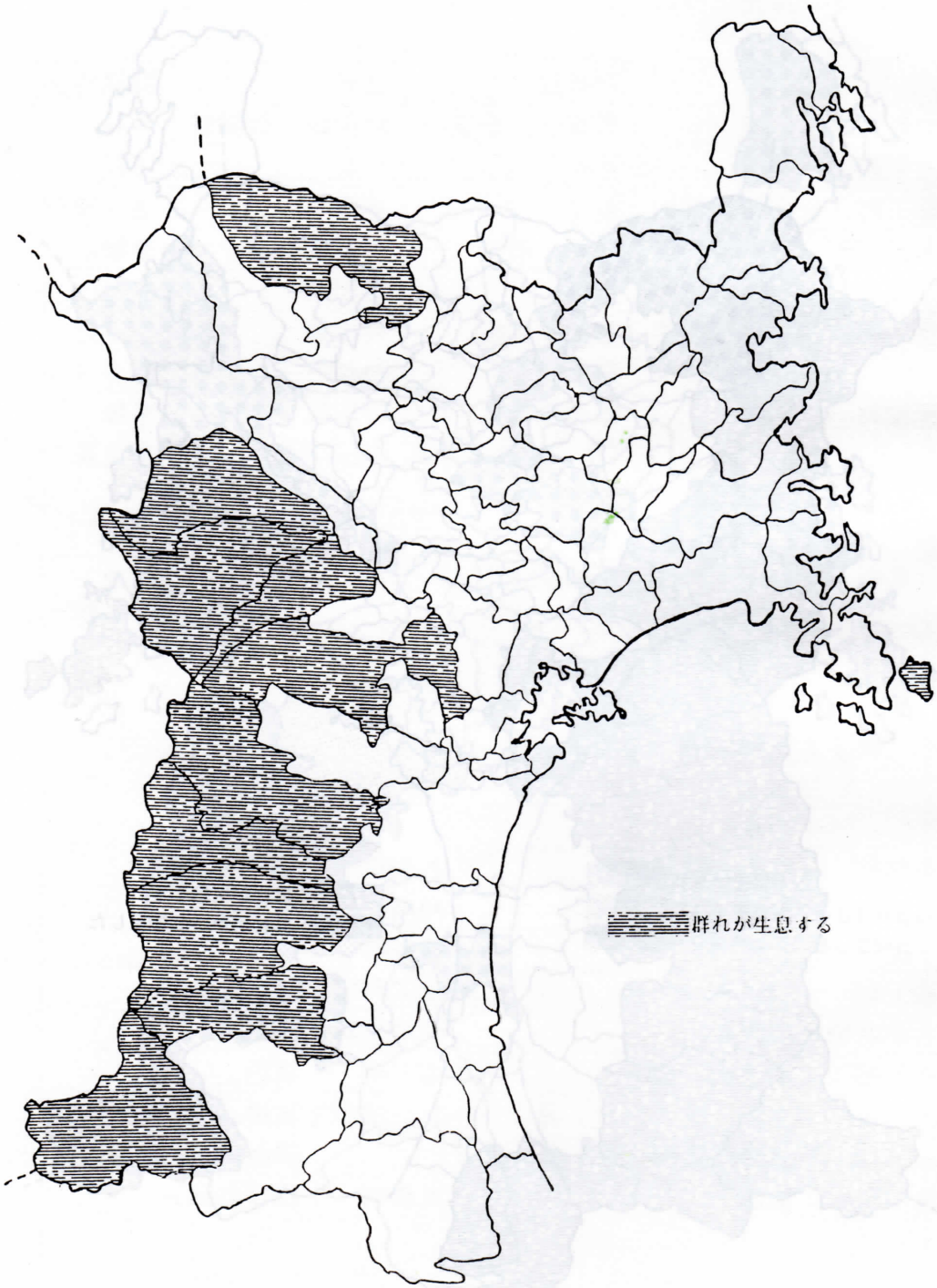

図4．竹下（1964）によるサルの分布

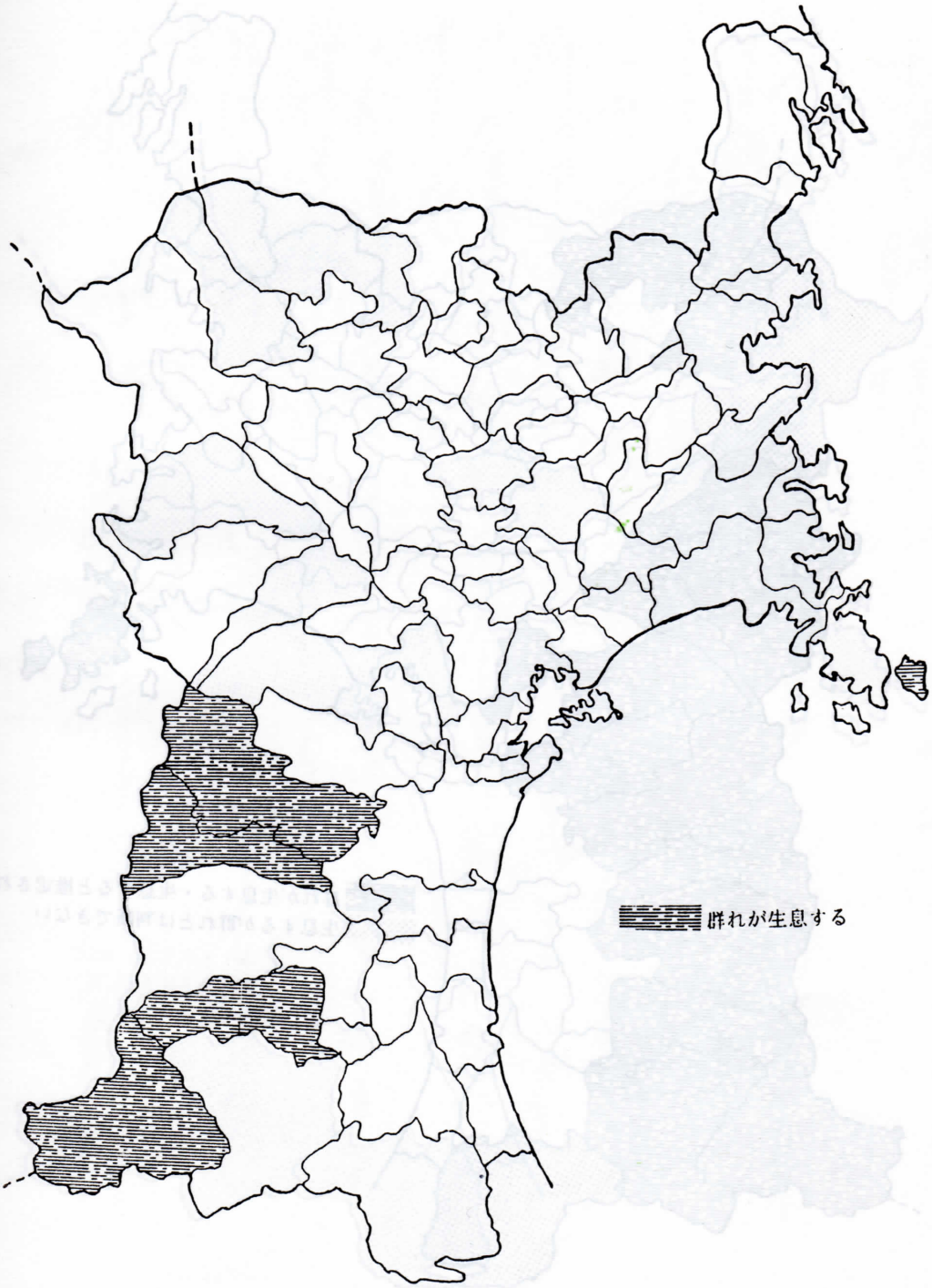

図５．環境庁（1981）によるサルの分布

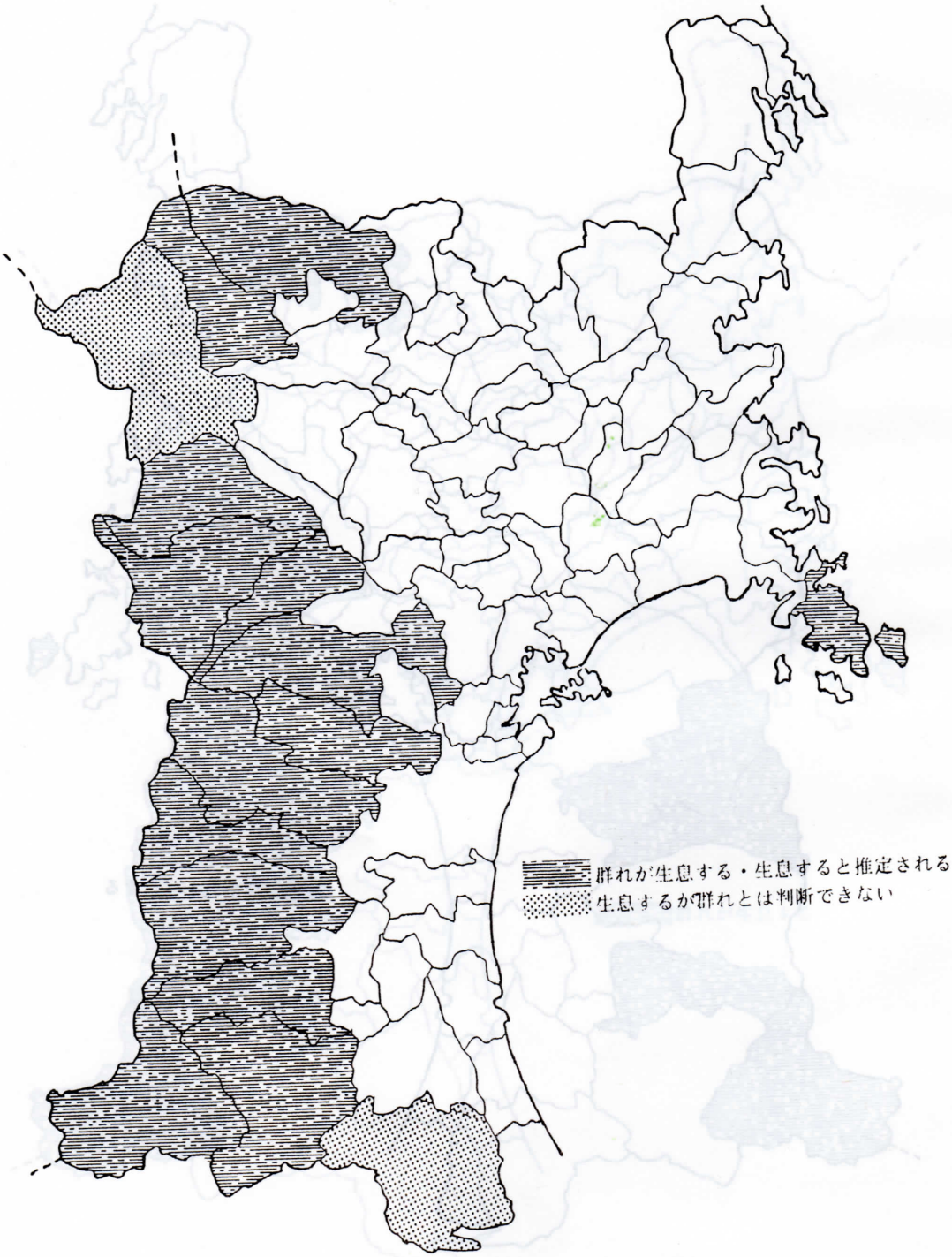

図6．ハナレザルの分布

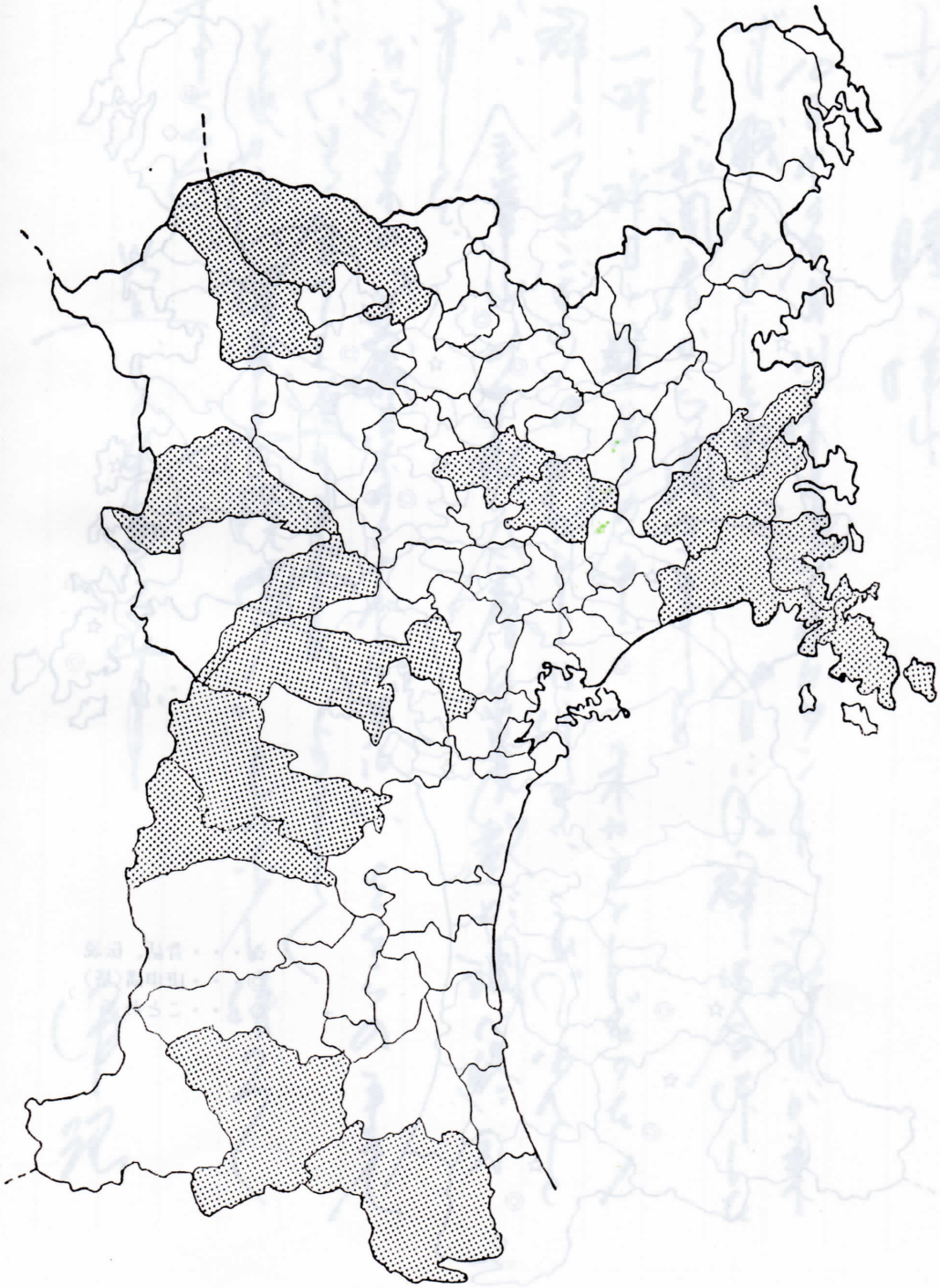

図７．民俗的なことがらの分布

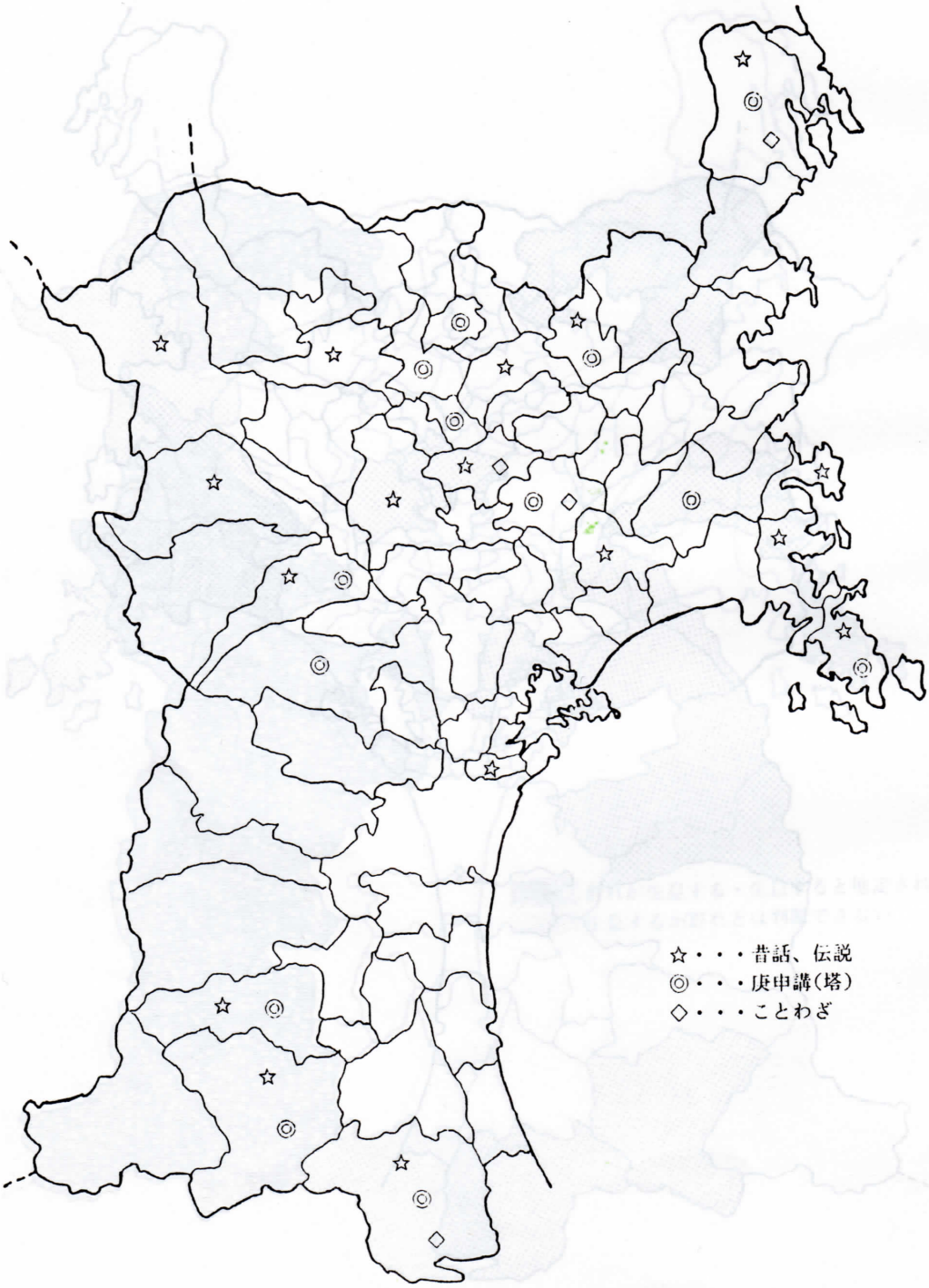

表　紙　題　字

宮城のサル調査会顧問　加藤陸奥雄筆